

第2講 マーリク・ブン・ファハムのオマーン定着と対ペルシャ戦から終結まで(続き)

マーリクがカルハートに目を向ける

既述の通りマーリクは、カルハートに女、子どもを残し、一緒に強固な守備隊を置いていった。ペルシャ戦が終わってから、その地(カルハート)における彼の指導権を支えるため、カルハートに歩を進めた。そこは近付き難い小村であり、優れた港町であり、そのため当時オマーン海岸では、インドからオマーンに来る人の、またソハールに来る前にアラビア海からオマーン湾に来る人の、会場場所として重要なところであった。そしてこの方面のオマーン商業拠点の殆どはここにあった。そして恐らく、ペルシャ状況を探査するのに最も近かったであろう。理由は、ペルシャへの海上交通路が今に至るまで通じていたからである。と言うわけで、彼(マーリク)の諸事が円滑に行われ、彼の支持が定着し、彼の王権が確固としていた時に、彼はそこへ移動した。しかしオマーン内陸部へは、彼の両腕(武力)を持って侵入しなかった。敵は、彼(マーリク)に関して、彼らの嫌っているものを見ざるを得ず、敵の狙いは部族の兜(マーリク)であり、それで一族・子孫は、予想される出来事から安全な場所にいる(必要性)があることを彼(マーリク)は知っていたからである。これは彼の策略の素晴らしさの一つである。そして不運がペルシャの上に起こり、彼らはオマーン中心部から追われる者として出て行ったのを見た時、マーリクはカルハートへ行った。(マーリク等の)諸王達は、彼らがいる地位に見合った施策を有しているのである。

イマームのサーミーが言っている。「マーリク・ブン・ファハムはカルハート側へ行った。その後、彼の心の中では、彼ら(一族)の諸事はそのままだった。つまり彼の日々の中で(ペルシャが再び襲来する日が)近づく事に準備をしていた。しかし彼は部族者とその他の者に対して何をすべきか分かっていなかった。不運の時は信頼なしに移り変わるのである。マーリクは既にペルシャとの戦いを実行したのだった。この事実はアラブ地域に広がり、それが(アラブの)心の内にマーリクへの賞賛や尊敬を増加させた。彼の威厳は頂点へと高まった。そして彼は、戦争以外は望まなくなり、突きと打ち以外は好まないようになった。マーリク・ブン・ファハムがペルシャ人の休戦している間、ペルシャ人達は、大きな河川の埋め立てを実行し始めた。理由は、その(休戦の)期間中にオマーンから出て行く時を除き、オマーンに落ち着いて(定住し得ない)ことを知っていたからであった。何故なら、その時代には、通信・伝達は人の足、駱駝または馬への騎乗によるものだったからであった。事の全てに神の英知があり、それぞれの時には事情があり、その時に適したものがあるものである。それでマーリク・ブン・ファハムとペルシャとの間の休戦は、両者の間の宣戦布告以外、取り上げるものがなくなってしまった。アラブの約束履行は、誰にも知られていることであり、特にこの件では疑いなくペルシャの不実がある。ペルシャ人は出て行くことを強いられて国を離れた。(それまでの間)ペルシャ人は出来ることは放置せず実施した。

ペルシャ人達は(彼等の)王にマーリク・ブン・ファハムから彼らに起こったこと知らせ、彼にマーリクが、マルジバーン族、アサーラ族の英雄達の幾人かを殺戮した者であると述べ、また彼が彼らを恥辱の場に置いたこと、またマーリク・ブン・ファハムが彼らにオマーンから出て行けと裁いたことを述べた。つまりそして彼らは、彼との休戦中であり、休戦はこの国から出て行くためのものであり、この国に落ち着くためのものではないと述べた。彼らの王ダーラ・ブン・ダーラは頑固な王であった。と言う訳でマーリク・ブン・ファハムとアラブの指導者達が共にオマーンに来た事、そして彼(ペルシャ王)の將軍達や軍全ての中で、マルジバーン族を彼(マーリク)が殺戮した事、戦争中彼らの間に起こった事、また彼らがそこで遭遇した事、(マーリクの)征服に関して彼らの身に起こった事、弱体化や弱い立場に彼らを置いた事の全てについて、ペルシャ王は烈火のごとく怒った。ペルシャ人達は王に対して家族や子供達を連れてオマーンを出てペルシャに行く許可を求めた。と言うのは、彼らは戦争が出来ないと理解していたが故であった。

王はオマーンにおけるアラブ戦争に自軍を準備

ダーラ王に知らせが届き、その知らせが伴って来た彼の部族に起こった殺戮、マーリク・ブン・ファハムが彼らに行った事、また彼らを恥辱に晒した事が、事実であることが分かった時、彼は激怒した。不安に取りつかれ彼の憤慨は熱くなり、それにより王のアラブに対する激烈さは高ぶった。しかしマーリクにとって幸運だったことは、ペルシャ人達は最初王にマーリク・ブン・ファハムの到来と、彼がペルシャ人達に対して満足しようが不快であろうが、オマーンに降りると要請した事とを知らせていなかったことであつた。それどころか自分達がマーリクを追い出し、国から追放出来ると考えていたが、その考えは彼らを裏切り、その事がマーリクに好都合となつた。もし彼らが彼(王)に知らせていれば、彼は軍を率いるか、または侵略を実行していたら、マーリク・ブン・ファハムは、その事で危機に立たされたままであつたらう。しかし既述のように、神が事を望まれ、その事に様々な理由を用意された。

ここで、王は、彼の側近と指揮官の内の殺された者に対する熱情に捉われ、その時、有力なマルジバーン族の指揮官から一人の指揮官を自分のところへ呼び、彼にオマーンに行くよう命じ、彼に勇敢で実績のある兵士 3000 人を付けてやり、彼をマルジバーン族とアサーラ族の先頭に立たせて、マーリク・ブン・ファハムが悲惨な目にあわせたオマーンに居た前述の彼の側近のところへ彼と支援軍を行かせた。王は彼らに援助と支援を鼓舞した。そして彼らにアラブとの戦争とオマーンから出て行かせることを約束した。この全てはマーリク・ブン・ファハムのその少しも知るころではなかつた。皆が(王の下に)到着した時、王は彼らをオマーンへ行かせた。この全てはマーリク・ブン・ファハムがその少しも知らぬことだつた。彼らがソハールに到着し、仲間達のところに集まり、彼らの間にある(問題点)について相談を始め、戦争の準備をしていて、休戦の期限が終わってしまった。彼らの情報がマーリク・ブン・ファハムに届き、マーリクは彼らの事に大きな関心を示し、彼らの情報を調べ始めた。すると支援軍が彼らのところへ着いたのは本当であつた。聞いた事に、マーリクの高慢な精神は狂喜し、彼に備わるアラブの激しさが高まつたのであつた。

マーリク・ブン・ファハムが再度ペルシャ壊滅の準備

マーリクは、前述の支援軍が上陸し、それがソハールに到着し、彼らが自分と戦争をするつもりであることを確かめた時、彼の方針が必要なのは、不屈の意思表示する事と遭遇のチャンスを利用する事、また彼らが、彼を弱々しく、脆く、受身である、と見てとらせないことだつた。その為には彼らに手紙を書いて次の様に言って脅した。「私は貴方達との間の約束と期限の保証を貴方達に実行しました。貴方達は、未だオマーンに留まっています、王を通して支援軍が貴方達のもとへ来て、貴方達が、私との戦争、戦闘の準備をしているとの情報が届いています。今は、貴方達が自発的にオマーンから出て行くか、さもなければ、私は馬でも足でも貴方達の方へ進攻し、貴方達の土地を踏み荒らし、貴方達の戦士を殺し、一族を捕囚にし、財産を奪う」と。時間を掛けず、代理者を立てずこの事を率直に彼らに話した。彼は言ったことは実行する人であつた。

マーリクの使いが彼らのところに着いた時、マーリクの命令が彼らを恐れさせ、彼らの目の中で命令の事の重大さが増大した。彼らの現状が彼らを鬱屈としたものにし、事態を大きく考えた。即ち過去に彼らが経験したことであつた。彼(マーリク)は、彼の軍が少なく、それに比べて彼ら(ペルシャ軍)が多くオマーン深くに侵入している軍であるにもかかわらず、言ったことは必ず実行する人であつた。その事と以前彼から生じた殺戮で彼らの身に起こった事により、彼らは熱狂し彼(マーリク)との戦いに特に派遣されたのである。そして彼らはこの為には投入された。彼(マーリク)を壊滅する能力を持っていた。そして彼(マーリク)に最も醜い返答と、その書簡の中で乱暴な言葉を彼に送つたのだつた。マーリクは彼らのそんな状況を見て取り、言葉の通り彼らに向かって進軍した。その時、彼は強い決意と偉大な忍耐をもって臨んでいた。即ちそのまま彼自身で戦争を直接行い、自分の兵士達より前に、(ペルシャの)英雄達に対峙し、彼らの方へ自分の騎馬と兵士達と共に出陣し、遂には彼らが集まり、軍勢を整えていた彼らの陣地に着いた。ペルシャはアラブの英雄に対峙した。即ち、彼は、彼らが過去に知り、彼も彼ら(ペルシャ)を知っていたアズドの王であつた。そして彼らは象を先頭に立ててやって来た。何故なら、象は彼らの最大の勢力であり、当時最大武力の一つであつたからである。また一頭の象は歩兵集団に相当する。それ故ペルシャは象を備えていた。アラブには象のようなものは無かつた。有るのは彼らの精神力と腕力だけだつた。神の助けは、神が望む者を勝

利させるのである。

両進行隊が接近し、両軍が遭遇したとき、マーリック・ブン・ファハムは彼の側近を各旗旗、各大隊へと閲兵し、彼らを鼓舞し、彼らにこれまでの習いの通りの指示を与えた。そして彼らを、彼のところにやって来た敵に遭遇する機会を得るが俥にした。ハナーが右翼に、ファラーヒードが左翼にいて、二人が両翼で、この両翼で軍隊は飛び立って行く。二人は戦略的なマーリックの力であり、マーリックの戦時参謀である。その長老(マーリック)が経験豊かな英雄達と共に中心に降り立った。彼らとペルシャ人達は素晴らしい遭遇をしたのであった。つまり激しい戦いを戦ったのであった。そして戦争の碾き臼が回った。昼間の長時間にわたり、有り得る中で最も激しい戦争の如きものとして。それからペルシャ人達は敗走し、自分達の陣地から脱して、戦場に彼らの巨象を残して行った。それでハナー・ブン・マーリックがそこへ赴き象を殺さんばかりに打った。その後指導者のファラーヒードが象を捕らえ、象の両足の膝髓を切った。すると象を、兵士達は出て踏み付け、英雄達は足蹴にし、象は絶叫した。それがペルシャ人達を打ち負かした事と、彼らの安全保障に関して彼らを強く揺り動かした事と、彼らを後退させた事、彼らの力を弱めた事とを示すものであり、特にまた彼らの敗北が一度ならず続くということを表していた。アラブの戦闘活動は増加し、そしてペルシャ人達は元へ戻って行き後退したが、彼らは英雄であったことは否めないし、戦争の獅子であった。

戦争はマーリック・ブン・ファハムとペルシャの間で終わりを求めて激化

ペルシャがこの戦闘で後退の様相を眼にし、またマーリックが彼らを戦死させ、一族郎党を捕虜にすると、彼らに彼が明言したことを実行するに違いないと思った時、(ペルシャの)兵士達に対して、他には注目せず彼を攻撃し、マーリックとの戦には死を求める者の如き忍耐で必死に耐えるよう宣言した。また(マーリックのアズド族の)誰も自分の居場所に残らぬことを目論んで、彼らはアズド族を一人一人攻撃していくことを思い描いていた。つまりマーリックに勝利するか、最終的敗北であろうが、ペルシャは他には眼をやらずに彼ら(アズド族)のところへと進軍した。アズド族はアズドで動きをし、勇敢なアズドの兵士の中で糾合した。高潔なマーリックが次の様に言ってアズド族に呼びかけた。「アズド族の諸君よ、彼らの旗を目指せ、それを探すのだ。今日という日には、明日が(かかって)いるのだ。あらゆる方向から突撃するのだ。」長老(マーリック)は王としての攻撃をし、ペルシャ人達に襲い掛かった。それは星が急降下して隕石になるようであった。すぐ部族の旗が見つかり、(剣や槍の)突きが混ざり合い、戦闘は肉弾戦となり、戦いは壮絶になり、粉塵は上がり、塵煙は太陽の目を隠すまで舞い上がるほどになり、聞こえてくるものは、剣の当り合う音、鉄の当り合う音、英雄達の上げる「ときの声」だけであった。矢を放ち合えば矢が折れ、剣で打ち合えば剣が壊れ、槍で突き合えば槍が折れる、彼らは耐えに耐えた。両陣営に負傷者、死者が多くなり、強いペルシャ人達に敗北の前兆が突然現れ、明日アラブ人達が彼ら(ペルシャ人達)に進軍して来たとき、アラブ人達を迎え撃つ力を見いだせなかった。そこで行く末を考えると、敗北か最後の死かが見えて来た。これは二つのことで、そのより甘い方でも苦いものだ。そこで敗北を選んだ。つまり彼らは敗北者として(敵から)顔を背けた。勝利者である英雄アズド族の騎士達が勝利に酔って彼らの後を追い、追いつき捕えた者を殺し、捕虜にした。その中の多くの人を殺し、また捕虜にもした。幸運は彼らに都合よく歩いていくのであった。

この期間に運命付けられていたことは、ファラーヒード・ブン・マーリック・ブン・ファハムが、ペルシャ軍の最高指揮官の一人である-アスヌフディヤール・イブン・アルマルジバーンと遭遇したことであった。ファラーヒードは一突きで殺すことを狙った突きで彼を突き、とどめを刺すため、剣で栄誉を与えた、それで捕まえたその時に彼は完全に死んでいた。(P92)アズド族の騎士達は、敗走者であるペルシャの跡を追って行き、彼らを殺し、捕え、財産を強奪する事をこの一日中続けた。遂には夜が両者の中に割っては入り、互いを阻止した。彼らの内で夜が隠した者以外に逃れた者は居なかった。イマームが次ぎの様に述べている。即ち、彼らの内で、夜の下、逃れ、隠れて、助けを求め続け、生き延びようとした者は誰でも耐え忍んだ。と言うのは、戦争に益はなかったのである。つまりそれらの戦闘を通じて、一日たりともペルシャに有利だった事はなかったのである。そして彼らは舟に乗ってペルシャの地へ渡った。マーリック・ブン・ファハムと一緒に居た者達は、彼らの耕地を占領し、彼らを

捕え、彼らの財産は戦利品とした。捕虜の多くの人達を牢に入れた。彼らは牢に長期間住んだ。その後で、彼らと生命の代価を必要とする者達を解き放ち、彼らに対して命を与えた。着衣をつけさせ、港まで送り、必要なものを供給し、舟でペルシャの地に運んでやった。オマーン全体と、オマーン湾に面した管理地域とを領有した。そこでは上手く行為が進行した。かくしてオマーンからのペルシャの一扫は終わった。(P92)オマーンに残ったのは、オマーンおけるアズド族の主であり、領有者であり、彼らの勇敢な指導者であるマーリク・ブン・ファハムの許に居る国民だけとなった。

これにより彼の情報がアラブ地域に広がり、彼の物語はタベの談話好きの舌に乗り、歴史家の語り草となった(オマーンを解放した王に従うために、南アラビア系のイエメンと北アラビア系のニザールのアラブ人達が糾合した)。

オマーンに色々な資源があり、高貴なるアラブの生活があったが故に、アラブの旗がオマーンの上にも続けて立つのに、長い時間はかからなかった。マーリク・ブン・ファハムは、ペルシャを恐れて、気持ちを静める様な人物ではなかった。彼と彼らの間に起こったことは既に知っていたので、状況は極限まで緊迫して、マーリク・ブン・ファハムはペルシャの動きを細かく監視し続けた。そして彼とペルシャ人達との間に過去の経緯があるので、ペルシャ人達側に気を許さずに、(彼の)部族が遭遇する事に対する準備を続けた。

私が知る限りでは、彼らは、既にオマーン王権の許から、捕囚、死者、負傷者として出て行っていた者達であった。諸歴史の研究から、私にとって明らかになった事は、ペルシャ人達はマーリク・ブン・ファハムとの戦いには戻らなかったということである。恐らくそれは彼らの下での内部事情によるものであろう。即ちダーラ・ブン・ダーラがその間に既に死亡していて、その為にペルシャの活動がオマーンで遅れたのだ。それでダーラ・ブン・ダーラの息子が王位を占めたが、彼はオマーン戦争には動かなかった。彼は極度に圧制的で傲慢な専制君主だったが、サリーマ・ブン・マーリク・ブン・ファハムの手で殺されたが、(これは)歴史家達が語る驚異の情報の中にあることである。(P93)イマームであるサーリミー(彼に神の慈悲があらんことを)がこの問題について、「名士録」の中で示し、次の様に言っている。

「その王は当時キルマーンの地にダーラ・ブン・ダーラの子供を幽閉していた。この前述の王をサリーマが殺した、とサリーマ事件に関する噂があった。曰く、「彼は王国の民と彼の部族に多くの不正と圧制を行う専制君主だった。等など」。ダーラ・ブン・ダーラ・イブン・バフマンこそが、オマーンでマーリク・ブン・ファハムと戦っていたマルジバーン族に救援を送った人物であり、サリーマ・ブン・マーリク・ブン・ファハムが殺したこの王は、あの王(ダーラ・ブン・ダーラ)の息子であった。と言うのは、そこ(オマーン)は、神の裁定により、彼(ダーラ・ブン・ダーラ)の手からマーリク・ブン・ファハムの手に移った直後、彼(ダーラ・ブン・ダーラ)の後に、王権は彼の息子とサリーマ・ブン・マーリク・ブン・ファハムが継いだ。二人は一つの時代にいた。この事は、我々が話したことを示しており、マーリク・ブン・ファハムとダーラ・ブン・ダーラが同年代で、サリーマと前述のダーラの子供が同様であることは明らかである。この様にして(時は過ぎていき)ペルシャ人達はオマーンへ数多く、強力になって戻っていくのである。」

イマームであるサーリミーが「名士録」第一部47ページの中で語っている。

「それからは王位がマーリク・ブン・ファハムの子供達に継がれていって、マーリク・ブン・ファハムの子が王位を終えるまでは、ペルシャ人の誰一人もオマーンへ戻ることは無かった。そしてオマーン王権はジュランディー・イブン・アルムスタクバル族へと代わっていった。彼はムアウワル・ブン・シャムス(族)の出自であった。ペルシャの王権はサーサーン朝になった。彼らはホスロー王に近いグループで、彼らとジュランディー家とがオマーンで次の様な条件で和解した。

即ち、オマーンで4千人のアサーラ族とマルジバーン族を、アズド族の諸王の許に総督と共に置く、と言うことであった。つまりペルシャ人達は海岸、海際に居り、アズド族は、国の残りの地域で王であり、諸事の全ては彼らに任されていた。この事は、諸事は元に戻り、ペルシャ人達に対し海岸に留まることを許す事を定めた合意が署名されたことを示している。そして彼らは、彼らの保護の隊列として4千人を見込んでいた。恐らく、彼らは一般市民を有していたのか、又は彼らの許には(以前からの)残留物があったのであろう。と言うのは、彼らはオマーンの地に戻って来て、諸事が静まるためそしてシャイターン(悪魔)の咆哮が軽減するた

めにも、当時（世の中の）視線は彼らにオマーン定着を容認することを必要としたのである。つまり海岸はペルシャ人達に、内陸はアラブ人たちの（定住地）となった。アラブ人のすべきことは、その国での浸透であった。地租は内陸には無く、海岸にあって、内陸の民のために（オマーン）国での力の源となった。しかしペルシャ人達はこの為と彼らの部族との連絡の可能性のために、海岸にいることを選んだ。また、海岸とペルシャ本国の間は、誰もが知るような近さであり、マクラーン海岸の光がオマーン海岸から相互に見えるのである。そのため、前に述べたペルシャ人達はずっとここ（オマーン）に留まり、イスラームが来て、ジュランディー族の王達がオマーンから彼らを追い出すまで居たのである。即ち、ペルシャ人達はイスラームに入ることを受け入れなかったのである。そして彼らは全てオマーンから出て行ったのだった。

イマームのサーミーは言っている。（彼の上に神の慈悲があらんことを）即ち、「マーリク・ブン・ファハムは偉大な王であって、イエメンの諸部族と家柄や数が様々な（前述の）彼ら以外の者達が彼を畏怖し、彼の力強さを恐れ、彼を誇りに思い、彼の勢いを誇りにした。彼には、彼以外の王達には無い勇気と大胆さがあった。彼はオマーンの中のイエメン側に宿営していた。」

私が言ったことは、イエメンの諸部族やその他者達が彼を畏怖しない理由は何かと言う事である。彼らは既に知っていたのである。即ち、オマーンで彼とペルシャ人達の間で戦闘があつて、遂には激しい戦いの後、彼は、ペルシャ人達をオマーンから強制され、追放される者達として追い出してしまったのであつた。そしてマーリクは依然として会戦の中心にいて、死者は次々と彼の手に落ちてきた。彼らが彼の力を恐れないということは無かつた。これこそが、彼の姿勢・態度であり、彼の勇敢さと彼の大胆さは知られていた。彼がオマーンとイエメンの間に宿営したのは、ペルシャの指揮棒の崩壊が実現したとき、国の諸状況を調べるためであつた。それ（ペルシャの指揮の破壊）は、恐らく我々が前に示したダーラ王の死という幸運にも符合したのであろう。そしてマーリク・ブン・ファハムはオマーン各地を巡回し、祖国の現状を調査した。

イマームが述べている。即ち、マーリクが海岸に下りたつ頻度が一番多かつたのは、オマーン沿岸のカルハートであり、彼はそこから他の地へ移動した。すなわち彼はカルハートを彼の治安上の拠点とし、彼の王国の首都として採用したのであつた。また（イマームは）述べている。彼の（領有）諸州、即ちオマーン国の一地域にアズド族の王の一人が定住していた。彼はマーリク・ブン・ザヒールと言われ、アブドラ・ブン・アルアズドの子孫であつた。しかし彼は自分が定住した地域を検分したこともなかつたし、彼がどのアズド諸部族の出自かも分からないし、どの様に彼が定住したか（と言う記録も）ない。

また（イマームは）言っている。彼は、威力、活力、能力において、マーリク・ブン・ファハムに殆ど似ていて、マーリク・ブン・ファハムは、二人の間に相互の嫉みがあり、一方が他方を支配す希望を持っていて、それで二人の間で戦争が起こることを恐れていた。この事は、マーリク・ブン・ザヒールがオマーン統治において共有する部分を有している者であることを示しているが、彼にはペルシャ戦での記述はこれまでに無かつた。恐らくオマーンのだこかの大きな都市に定住したのであろう。と言うわけで、マーリク・ブン・ファハムは、彼に対してペルシャが行動したとき、彼にとって、彼（マーリク・ブン・ザヒール）が援助、支援になるように、彼（マーリク・ブン・ザヒール）に支援と（戦争期間において）彼（マーリク・ブン・ファハム）に関与しない事、と言う同情を示した。つまり彼（マーリク・ブン・ザヒール）は部族のことを心配し、それ故に彼（マーリク・ブン・ファハム）に対抗しなかつた。彼（マーリク・ブン・ザヒール）は非常に思慮深く、マーリク・ブン・ファハムの活躍範囲は広がった。

イマームが述べている。マーリク・ブン・ファハムは、二人の間の妬みあい、嫌い合いの苦難を断ち切るために、彼（マーリク・ブン・ザヒール）の娘、ヒザーム・ビントゥ・マーリク・ブン・ザヒールと婚約した。

戦争終結後のマーリク・ブン・ファハムの功績

マーリク・ブン・ファハムは、オマーンにおけるペルシャの居城が崩壊し、彼らの棘（戦意）が壊れるのを見たとき、賢明な彼の政策と的を得た彼の意向を実施するために（オマーンの）内部問題に戻った。そして自分の視線を諸王国のうちオマーンの周辺にあるものと諸国のうち王国に属する国に向け、また辺境の地を行き来し続けた。何故ならそこが（オマーンへの）

出入口であったからである。そして(上述の)種々の特別な場所に降り立ち、管理統括する様々な場所に滞在したのであった。彼こそがあらゆる船を強奪した男であり、アラブ人達の偉大な王であった。

イマームが 35 ページに述べている。「彼はオマーン沿岸のカルハートに降りて、そこから他の地域へ移動した」。即ちそれが彼の習慣であった。既に私が当時のオマーンのカルハートについて知ったのは、彼が(カルハートを)アラブ人のためにオマーンへの移住の拠点として開いたことであり、それはアラブ人安寧のためとマーリクの部族での戦意が強まるようにするためであった。すると、すぐにアラブ人が、集団で又個人で、イエメン族もニザール族もオマーンへ、オマーンを満たすまで、移住して来たのである。と言う訳で、マーリクのオマーンにおける権威は拡がり、バハレーンとイラクの幾つかの辺境地域をオマーンに統合するまでになった。

つまりイマーム・サーリミー(彼に神の慈悲があらんことを)が示した様に、彼はアラビア半島の諸王達の中で、偉大で権力を有した大いなる王となったのである。即ち彼は次の様に述べている。「その事が原因で、マーリクはオマーンと、イラクの幾つかの辺境地域とオマーン周辺の王となった時、、、」。即ちそれは、マーリクがイラクにおける幾つかの辺境地域の王であり、バハレーンのようなオマーン周辺とその行政区域の王であったことを示している。そしてオマーンの各地を、その地の諸事を探索し、その地の情況に注目し、半島の行状の進展を観察しながら移動したのであった。彼には反抗者もライバルも無かった。マーリク・ブン・ザヒールについて、歴史はオマーンにおける業績の何も語っていないが、彼が唯一の権力者であり、英雄達に遭っても彼の血が変わらなかったマーリク・ブン・ファハムに影響を及ぼす事態があった事を述べている。マーリク・ブン・ファハムの王としての寿命は長く、オマーンとその周辺を 70 年間支配した。アラブ又はペルシャの対抗者の中には、彼の王位に対抗する者は無く、ムダル王として 20 年統治し、120 年生きることになる。

彼の死はヨセフの兄弟達の計略(クルアーン、聖書参照)ではないかと疑いが持たれている兄弟間の計略に依るものだった。即ち、前に述べた様にマーリク・ブン・ファハムはマーリク・ブン・ザヒールの娘と結婚した。彼はマーリク・ブン・ファハムに対して、彼女の子孫が王位を継ぐとの条件を付け、マーリク・ブン・ファハムは彼に合意したのであった。この事がマーリク・ブン・ファハムの子供達の心に影響を与える事を避けられなかった。

特に彼女との間で、王位を相続で継ぐべき男子幾人かできて、(その内の一人が)残りの(異母)兄弟達に代わって王位継ぐ場合に。そこで神の裁定と運命は、(マーリク・ブン・ファハムの妻である)アルヒザーム(ザヒールの娘)に男児をもうけさせた。人々は彼に関して平安を誇張するためにサーリマ(平安)と名付けた。彼は高貴のイメージが顔に現れている息子で、マーリク・ブン・ファハムは彼をこよなく愛していた。

彼の兄弟の言では、これは我々が予期していた通りで、母親の父親であるマーリク・ブン・ザヒールがつけた条件に従って、サーリマは疑いなく自分達の王になるだろう、とのこと。そして兄弟は共謀して、彼に完全な関心を向け、極度に達する偏愛をしている父親の愛の椅子から、彼を落とす騙しを画策したのであった。そしてマーリク・ブン・ファハムは、現代人達が近衛兵と名づけている内部警護の役割を子供達の背に課した。それが誰であろうと兄弟達以外マーリクが信頼出来る者はいなかったからである。彼らの一人一人には当番があった。兄弟達は彼らの父親に言った。「嗚呼、王よ。あなたの息子サーリマは警護の義務を果たさず、眠っているので、私達はサーリマの当番の時のあなたを心配しています。」これの意図するところは、サーリマについての王の想いが壊れ、彼を追い出すか、もしくは拒否し、側近の仕事については彼の言うことを何も受け入れないようにすることであり、それがサーリマを王冠から引きおろす結果になるということであった。

マーリクの息子サーリマに対する愛に関して、次の(逸話が)伝わっている。即ち、彼がサーリマに矢を放つことを教え、会得する程までにしたということであった。それが、その当時の戦争において力であった。それで彼は、兄弟達と同じ様に警護したのであるが、兄弟達は、彼の悪いところは、熱意の弱さと不能ぶりだと関連付けた。彼は、夜が更けると彼の部族の騎兵達から離れ、眠り込んでしまい、するべきことを無視していた。

「彼にはあなたにとって、十分なもの、必要なものはないのです。」

彼らは彼の父親のいるところでは、彼の諸事に懸念を生じる事を言い始め、それを彼の弱さと(能力)不足の所為にしよとした。

するとマーリクが彼らに言った。

「君達はそんな事を理由としているのか、君達の誰一人すべきこととしている者は居ないではないか。わが息子サリーマを拒否したと言う君達の言い分だが、彼は決してそんな風ではない。私の彼に関する思いは、私が彼について知っている通りだ。」
そして次の様に言った。

「兄弟達が互いに妬み合ったままでは、父親(原文は複数形)は如何なる者も動揺したままになるではないか。」
すると兄弟達は、望んでいたものを得られぬまま、父親の元から、集団戻り出て行った。

イマームが言っている「マークに疑念が取りついた」と。

私が言ったのは、疑念ではなくて、(国に対する)気遣いで、この事は、首長たるものは、状況を詳しく見ない者であってはならない、と言う個々の首長の義務から来ている事である。つまりこの事は、あってはならない無視から生じたことである。

また言っている。「マークはこの彼ら言い分を腹に収めて、彼の子供であるサリーマの当番のあるその夜を待った。すると皆の習慣通りに警護の騎馬隊の中にいたサリーマは出てきて、騎馬隊から離れ隠れ場所に入った。サリーマには、兄弟達が彼に関して画策した策略について情報は無かった。また以前のように、怠惰でも無能でもなかった。サリーマは父親の家の近くにあるいつもの彼の隠れ場所に隠れた。

彼がこうしている間に、マークは、誰も知らない所から、暗渠の中を城から隠れて出て、子供達のその一人の兄弟に関する言い分を確かめるため、近付いていった。そしてサリーマがいる場所に狙いを定めて、彼がどうしているかを見るために、向かった。避けられぬ神の裁定は、神がマークを導き、彼の死の理由となる瞬間に、サリーマに眠気がとりつく事だった。

サリーマは馬の背中で居眠りしていたが、これ(眠り)は当然のことながら人間を圧倒することである。そしてサリーマはその時既に、(彼の)矢筒はひっくり返し、手には弓を持ち、という状況であった。そして馬は、人即ちマークを感じとった。神が馬の感覚に息吹を吹き込み、視覚を他の馬に創造しない程のものを(その馬に)創造していたのであった。それでマークが遠くにいたその時、馬がいななき、感じたものを騎乗者に警告したのだった。

それで、かの新しい若き英雄サリーマは、彼(マーク)の動きの全てに気付いた。(この青年は)、馬のいななき、それが目にしたものの以外に対しては、いななかないという馬の習性なのだが、その恐れに対する(警戒)に必要な、彼の行動の一挙一動を成す事が出来るものであった。と言う訳でサリーマが自分の馬を見ると、感じた人の方を向け両耳を立てていた。それが馬から乗り手への通達行為であった。

サリーマは馬が指し示した人に向け弓の中心に矢を構えた。このときそれが自分の父親だという情報は無かったし、そのときのマークの関心事も何であるか知らなかったのである。マークは、サリーマが(弓を)引いて父親の王に向け、矢を引き絞った時、矢の音を聴き、彼に向かって「射るな、私はお前の父親である。」と叫んだ。マークが、私はお前の父親だ、と言っていた時、既に矢は放たれ、その弾道の空を舞い揚がり狙った人に向かっていった。その時サリーマが不注意でしてしまったことを責める声で、「矢が狙いを持っていたのだ」。即ち自分には応じようがなかった、と言った。そして矢はマークの心臓に当たり、彼は地に倒れたのであった。

サリーマは-矢が狙いを持っていた-という言葉を通り、矢を放った。その時マークは彼の生涯の最後の歴史となったこの詩を朗詠した。その中で彼の業績の重要な事について説明している。またその中で彼の息子のサリーマに向かって語っている。

私は彼に毎日弓を射ることを教えた

彼が強くなったとき私を射ることになった。

その意味するところは、私は彼が私を守って敵を射るために、弓を射ることを教えてきた。彼が上達し強くなった時に、私に弓を向ける射手になっていた。その中にはサリーマに対する非難もあった。彼は、弓を射たとき、又は私が彼に射るなど呼びかけた時、恐らく相手が誰かを知っていたのではなからうか。にもかかわらず彼の方からは射る(音)以外の答えはなかったのだ。

ところで何処から彼が父親であるという情報が来たのであろうか。そしてマークの呼び掛けを彼が聞いた時、矢はマークを標的にせざるを得なかった。運命は人を支配する者であり、その発生は避けられないものである。物事のそれぞれには、そこで終わる目的があるものだ。サリーマには罪はなく、仕方の無いことだった。

しかしながら、既に我々が述べた様に、その事は兄弟の陰謀の結果であり、首長の座に立ちたい気持ちとライバルに勝ちたい気持ちとが、このような状況を必要としたのだった。我々はこの事件の発生が、オマーンのどの時点、場所であったかを知らない。というのはオマーンの歴史は、日々が錯綜したまま(記録として)広報されることなく皆に広がった為である。

確かに、マーリクの謀殺の情報は重大事であり、王国の関心事であり、その進展を語ることは避けられないが、オマーンの進展はオマーンにおけるスルタンの悪政とその時代以降オマーンを通り過ぎた期間は、その長さが故に消え去ってしまった。我々はその(出来)事を知る事が出来れば良いのだが。と言うのは、それは歴史の重要なものの一つであり、恐らくカルハートでのことであろうと思われる。神は一番ご存知のお方である。